

ひとりの鑑賞者として

今は誰でもこれがレディメイド、既製品「デュシャン」を知っていますが、当時は知りませんでした。そのなかで、自分自身いろいろな発見がありました。そういう経緯を今日はお話ししようと思います。

まずは、「デュシャンがいろいろとインタビューを受けた時の言葉をいくつかご紹介します。

ひとつは、アートとは作り手だけのものではないところです。(つまりアートには)2つの極があるといふ。ひとつは、作る「アーティスト」がいる。もうひとつの極には、それを鑑賞する「鑑賞者」がいる。この両方がないとアートは成り立たないと書いています。むしろ鑑賞者、作品を見る人にも相当重要な役割があると彼は言っています。

別のインタビューでは、アーティストは自分の作品を完成させることはできないと言っています。何を作ろうとしているのか、何を意味させようとしているのか、自分でよくわかっていない。だから半分しか作ることができません。作品を完成させるのは鑑賞者、作品をどう扱うか、どう観るかという鑑賞者の役割が非常に大事だと言っています。

ですから観る人の解釈によって作品は出来上がるんだけれども、さらには、観る人こそ芸術家が観ていないものを観てしまうのです。と本人が言っています。作った人よりも観たの方があつて、いろいろなものを作る可能性があるのです。

そこで今回の展示は、「デュシャンの便器を紹介・展示する」ということではなくて、「鑑賞者としてひとつ作品を完成させる」という意識でやってみました。別に自分が作ることができる、作品を完成させるのは鑑賞者、作品をどう扱うか、どう観るかというの

好みになっちゃつたんです。そしたら後で、これはフランスで普通に売られているものだと知りました。カツ「ハイ」「こんなものを作る人はすごく格好いいアーティストなんだ」と、デュシャンをいきなりいいました。

今までも瓶乾燥機や雪かきシャベル、特に櫛などは格好いいと思いません。形がすごく大好きで、でもそれらと比べると、「デュシャンの中であの便器だけが僕はあまり良いと思つていませんでした。

あの便器は「事件」として捉えていたんです。「デュシャンはかなり目利きの人ですから、他のレディメイドと同じく、感覚的に選んだとは思つていませんで、たでも、今回便器のこと調べてみましたら、そうでもないということがよくわかりました。

The Richard Mutt Case

「ご存知かと思いますが、『デュシャン』は、この作品(《泉》)を「アンデパンダン展」という無審査の展覧会にリチャード・マットという名義で送りつけ、展示拒否に遭いました。それから1ヶ月後、アンリ・ピエール・ロシエ、ベアトリス・ウッド、マルセル・デュシャンの三人で発行している『ブラインドマン』(2号)という小冊子でこの事件について特集しました。そこで掲載された「リチャード・マット事件」というタイトルの記事が素晴らしいのです。署名記事ではなく、誰が書いたかというのには、まだにはつきりとはされていないのですが、どう見てもデュシャンが書いている。

今回はこの「リチャード・マット事件」の日本語訳全部を会場でも配布しています。その内容はすごく簡単で、ツボを得ており、非の打ち所がありません。

まず、「いわゆるアンデパンダン展は6ドルを払えば——これは出品料が5ドルで、会費が1ドル——6ドルさえ払えば、誰でも作品を展示できるものだ」と。リチャード・マット氏は6ドルと作品を送ったが、本人には何の相談もなく、展示されることが書かれていたんですね。それが初めて「デュシャンを知ったきっかけです。

ですから観る人の解釈によって作品は出来上がるんだけれども、観る人こそ芸術家が観ていないものを観てしまうのです。と本人が言っています。作った人よりも観た方があつて、いろいろなものを作る可能性があるのです。

そこで今回の展示は、「デュシャンの便器を紹介・展示する」ということではなくて、「鑑賞者としてひとつ作品を完成させる」という意識でやってみました。別に自分が作ることができる、作品を完成させるのは鑑賞者、作品をどう扱うか、どう観るかというの

好みになっちゃつたんです。そしたら後で、これは

今までも瓶乾燥機や雪かきシャベル、特に櫛などは格好いいと思いません。形がすごく大好きで、でもそれらと比べると、「デュシャンの中であの便器だけが僕はあまり良いと思つていませんでした。

あの便器は「事件」として捉えていたんです。「デュシャンはかなり目利きの人ですから、他のレディメイドと同じく、感覚的に選んだとは思つていませんで、たでも、今回便器のこと調べてみましたら、

そうでもないということがよくわかりました。

それから2番目の意見に関しては、これは「デュ

シャン以外には言えないと思うんです。「自らの手

でのfountainを作ったか否かは重要なことで

はない」。そして、これは今回の僕の展示のタイト

ルにもしているのですが、「彼はそれを選んだのだ

とを言つている。

だから2番目の意見に関しては、これは「デュ

シャン以外には言えないと思うんです。「自らの手

でのfountainを作ったか否かは重要なことで

はない」。そして、これは今回の僕の展示のタイト

ルにもしているのですが、「彼はそれを選んだのだ

とを

イタリアのショウアルツ画廊がスティーグリッツの写真を元に図面を作った複製です。それが8セット、世界の美術館で展示されていますが、これは4つバージョンと呼ばれています。1番バージョンはスタイルグリッツが撮影したものです。そのバックピュー、背面写真。初めて見ました。

今回の4階の展示は、この合わせ鏡の設置の仕方を参考に行っています。写真館に見立てているんです。リチャード・マット氏が来て撮影したという感じになっています。

A close-up photograph of a black metal chair leg, showing its rectangular profile and how it connects to a horizontal bar.

そうすると、これがトイレで使用するものだという意識がまったく消えます。純粹に物の形が見えてくと「ああ、素晴らしい」と、ここでデュシャンが乗り移ってきたんですね。予定どおり合わせ鏡の前に設置みると、後ろ姿がやっぱりきれいです。この時には、だっここの穴(排水口)は開けていないんですけどね、ほれぼれしてきます。

最初は本当に勘だけで。この(友人)にもうつま
れていることに気づきました。上下に反転した像
なんだかオーラを放ってきてます。鏡にレ
ガラスを通していくと、さらに格調高く、グレ
アップしていく。素晴らしい作品というのは、どう
ものです。やっぱり便器はすごいと今回思い知
れました。

は、入って梱包から解がれて出て来るまでは本当に便器にしか見えないんです。仮に置いてあっても、便器が置いてあるようにしか見えない。ちゃんとステージを用意して置いた途端に、急にスターの便器が登場して「ああ……！」ということになるんですね。デュシャンがそこまでわかつてやったのか、たまたま天使器を購入しただけなのか、わからないのですが



便器と 合わせ鏡

『泉』について書いてある本だと思つて、このカタログを開けたら、いきなりこのデュシャンのポートレート(合わせ鏡に映るデュシャン)が出てきてびっくりしました。便器の出品と同じ年の1917年10月10日に撮影されたものです。便器が出品拒否されたのが4月の展覧会だから、半年くらい経った頃です。『ブラインドマン』と一緒に出したロシエや、ピカビアというアーティストも一緒にいて、同じようにポートレートを撮っています。今で言つたらプリクリアとか、ああいうものなのでしょう。こういうものを写真館に行つて撮影するのが当時は流行つていたようです。特にファッショニオン雑誌ではいろいろな方向から服のビジュアルが見えるということで、合わせ鏡による撮影がよく扱われていました。

たところよつない」と書いてありました。正規のやり方ではないけれどところう意味で「extra collection」というらしい。それをわざわざ後のから撮つてぶるやうだ。そうするとまた見え方が変わって驚きました。中の論文も説明が丁寧でおもしろいです。たとえば、リチャード・マットとハーベンホームページの「マット」がどうかぶっているか。当時の水回り品で有名な会社がMott社といったのだそ�です。日本で畠つたふTOTOとかですね。やがて「Mott」をもじったと、さむじむつらひの由来と思われるが、当時流行っていた漫画の『Mutt and Jeff』から持つておられたのではないかと畠われてこおる。

今回の4階の展示は、この合わせ鏡の設置の仕方を参考に行っています。写真館に見立てているんです。リチャード・マット氏が来て撮影したという感じになっています。

「」の合わせ鏡のポートレートで非常に面白いと思ったのが「デュシャンが5人いるよう見えますが、当然ながら実像はこの真ん中の後ろ姿しかない」ということです。後の4人は全部、鏡に映った虚像。ということは、実はこれはデュシャンの後ろ姿を撮影した写真なんです。ポートレートと言つてこんな奇妙な写真はない。

そうすると、これがトイレで使用するものだという認識がまったく消えます。純粹に物の形が見えてくると「ああ、素晴らしい」と、ここでデュシャンが乗り移ってきたんです。予定どおり合わせ鏡の前に設置してみると、後ろ姿がやっぱりきれいです。この時にはだっこ穴(排水口)は開けていないんですけどどちらぼれしてきます。

これは私のアトリエです(左図・会場笑い)。デュシナンのアトリエに倣って壁に掛けてみました。すごくぴったりです。まわりと溶け合っていて、訪ねてく人は気づかないんですよ。帰りに見てびっくりす

していることに気きました。上下に反転している
なんだかオーラを放ってきてます。鏡にして、
ガラスを通していくと、さらに格調高く、グレ
アップしていく。素晴らしい作品というのにはこう
ものです。やっぱり便器はすごいと今回思い知
れました。



藤本由紀夫《VEXATION》2017年（撮影：宍屋友樹）

展不計画

室の入り口に置いています。それを英訳した原稿がメールで届いたのですが、合わせ鏡は「Infinity glass」つまり「無限のミラー」と訳してあつてなるほどといいました。「デコシヤンも、あの写真館で合わせ鏡のポートレートを撮った」とが後の作品の発想のひとつになりました。原点になつたのではないかと僕は推測したんです。今回ばかりは「デコシヤンのメモもケースで展示」しています。(メモの一部は)通称《ホワイトボックス》と言われていますが、正式名称は日本語で《不定法》と訳されていて、英語では《In the Infinitive》といいます。JRJでも「Infinity」が出てきたかと思いました。その中から鏡や虚像、実像といったものにまつわるメモを選びました。

おわりに

ただ、びっくりしたのはそんなことではなくて「ルム」「物」としてあんなに素晴らしい形をしていて実感したのが今回の驚きでした。便器は便器と思っていたんだすけれど。よく、大スターってそんへんにいる時はほとんど目立たない人が多いとしますよね、地味で。だけれど、ひとつたびスボットトラトトを浴びると急に大きくなつてオーラがでてくれ

『泉』(が)これほど観客にいろいろなことをえさせる作品であることを今回は実感しました。なんだかオーラを放ってきてます。鏡にレンガラスを通していくと、さらに格調高く、グレーアップしていく。素晴らしい作品というのは、ついでです。やっぱり便器はすごいと今回思い知られました。

最初は本当に勘だけで。この(友人にもらったタログを開いたら)デュシャンの「合わせ鏡の写真」あって、そこではデュシャンが後ろ姿を撮影していくことに気づき、デュシャンの後ろ姿と便器姿が重なって、そうして今回の展示が決まりました。ただ、それだけではなくて、彼の頭の中では4次の投影されたものであるとか、鏡に映った像と絵の関係など、かなり本質を突いたテーマとして捉えていたのではないかと思います。僕が観客としてつまづいて、「もう一方の極」で100年前の便器の完全版を作つてやるうというのが今回の展示でした。

今年がちょうど便器 100 年で、デュシャン関係のプロジェクトにほかにもいろいろ参加させていただいています。だから今年くらいデュシャンのことやりたいことやつておこうと思つたら、来年がデュシャン没後 50 周年（会場笑い）。2 年続くんです。来年もまた何かやりたいなという気持ちがあります。



る